会報 峠 とうげ
河井継之助記念館
友の会会報
第26号
2019.10
〈編集・発行〉
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目甲1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）
〈編集人〉
荒木法子　恩田富太
堀口晴夫　友の会事務局
〈構成・印刷〉
高速印刷株式会社

『塵壺』命名の由来など

学校法人中越学園 理事長　土田 和弘

河井継之助に関する資料の多くは口伝や第三者の証言によるものであり、唯一の著作というべき紀行文『塵壺』はその点でかけがえのないものです。しかしながらなぜ『塵壺』と名付けられたのかの由来は伝えられていないようです。

河井さんは、文献は多読よりも精読すべしという考えであったと伝えられていますが、しかし同時に日本の通俗的読み物には多く接していたようです。私の考えは、河井さんは『塵壺』の旅に出る前に十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を読んだはずであり、また『塵壺』の由来もそれに拠る、というものです。

『東海道中膝栗毛』第六編上の「附言並凡例」に、作者による次のような記載があります。「夫花は半開に詠、酒は微酔にのむがよいとの譬の通り、ものは十分ならざるをかえって壮観と心得べし」。

これは、旅行資金を父親に願った書簡を想起させます。河井さんはその書簡を長岡に向かう村松忠治右衛門に託すわけですが、そのときのことを村松が後に『思出草』のなかで書いていて、そこで上記と同じ文言を記しています。そして河井さんからの依頼で父親への土産として、半開の桜の枝と微酔という文字が描かれた酒盃を用意し持参したとなっています。

岩波文庫版『東海道中膝栗毛』では編集者の注として、関度撰『聴松堂語鏡』にある「酒飲微酔、花看半開」がその出典であることが示唆されています。これは驚くべき記述です。『聴松堂語鏡』の「聴松」とは、河井さんの父親の茶道の号名であったといわれる「聴松庵」を想起させます。

私が思い描くストーリーは、次のようになります。「花看半開、酒飲微酔」は当時、洪自誠『菜根譚』などによって広く知られ、『聴松堂語鏡』の方はそれよりややマイナーなものであった。河井さんは父親への書簡を書く前に、膝栗毛を読みそれを思い出し、その内容を土産として村松に託した。河井さんは、『聴松堂語鏡』も読んでいて、「聴松庵」たる父親への土産としてふさわしいと考えた。父親の方にもその含意を了解できる素養があった。もしかしたら「聴松庵」という名前も『聴松堂語鏡』に拠っており、父子が共有する了解事項だったかも知れません。『聴松堂語鏡』にはその後の河井さんの言動を彷彿とさせる文言がいくつか記載されてもいます。

『塵壺』のなかに熊本の宿での見聞を書いた次のような記述があります。

（熊本の宿を用事で河井と）供に出でし大坂の者は、盃の画を書く者にて、宿の者、其の伝授を受くとて（その大坂の者を）留め置く由。其の絵の具、買いに行く用事也。白焼（すやき）の盃を弐十計り買い、其の上に画を書く由。（十月二十二日）

河井さんはこの話しを聞いて、びっくりしたのだと思います。もしかしたら、父親に贈った盃もこの「大坂の者」の作なのかも知れない。世界は現在よりずっと狭かったのです。

膝栗毛では上記の引用の直後に、十返舎がへりくだって自分の作品を「塵芥」、「塵」、「塵埃」のごときものだと呼んでおり、「塵」ということばを続けて三回も使っています。河井さんは、膝栗毛を読んで父親への土産を思いつき、さらには紀行の標題を『塵壺』とするきっかけともなった。『塵壺』命名の由来は膝栗毛であった、と思います。

『塵壺』は紀行文ですから、意味の分かりづらい点などが多々ありますが、それらをうまく解明できれば、まだまだ多くの情報が眠っているのではないかと考えています。

土田和弘（つちだ かずひろ）
プロフィール
昭和22年（一九四七）長岡生まれ長岡育ち。
学校法人中越学園（長岡大学、中越高等学校）理事長。
河井継之助全集の発刊を願っている。